

「学んだことを伝える力」の育成をめざした教育実践 第2報

～プレゼンテーションによる伝える学習を通して～

半沢康至 柴崎功士 有友愛子
廣瀬由美 平石達彦 金子俊明

筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部（以下、中学部）3年生が、今までプレゼンテーションを通して学んだ伝え方のスキルを後輩に伝えることを目指し、学んだことを伝える場として後輩に向けた発表会を行った。「聾学校に通う中学生の学校生活」をテーマとし、発表会のリハーサルでは、第三者の役割を担う遠隔地の大学生とビデオ通話によるリアルタイム型の双方向授業を行い、客観的なアドバイスを受けた。大学生からのアドバイスを元に見直しを行った本番の発表会では大学生からのアドバイスが生かされ、伝えたいことを的確に後輩に伝えることができた。客観的な評価を得ることで学習効果の高まりがみられ、伝え方に関する今後の課題を見いだすことができた。

【キーワード】 プレゼンテーション 伝え方 双方向授業 ビデオ通話

1 はじめに

本校中学部では、2007年度から異学年構成によるアニメーション制作及び作品の発表に関する学習に取り組んでおり、2008年度は前年度の実践をふまえ、「学んだことを伝える力」の育成をねらいとした実践を行い、半沢ら（2009）が全日聾研山形大会で報告している。

2008年度は、漢字の字源をアニメーションで表現し伝える方法について、異学年構成の学習グループで先輩から教わる立場として学習に取り組んできた生徒が中学部の最上級生となり、学んだことを伝える学習活動に取り組んだ。山形大会では、ループリック評価の結果から、異学年構成の学習グループによるプレゼンテーションの学習が生徒の活動の高まりにつながったことを明らかにしている。そこで、3年間のプレゼンテーションの経験を通して学んだ、伝え方のスキルを後輩に伝えることを目指し、「聾学校に通う中学生の学校生活」というテーマでプレゼンテーションを行った。本報告では、伝え方のまとめの取り組みについて報告を行う。

2 学習の経緯

対象生徒は本校中学部3学年生徒（18名）、2学年生徒（15名）である。また、第三者の立場としてビデオ通話により大学生（3名）が参加した。

3年生は、3年間を通して伝えることをテーマと

したプレゼンテーションや要約スピーチ等の学習活動に継続して取り組んできた。（表1）

表1「伝える」をテーマとした3年間の取り組み

	テーマ	対象
1年	校外学習のプレゼンテーション －体験したことを伝えよう－	生徒（同級生） 保護者
	「漢字の字源」のプレゼンテーション① －学んだことを伝えよう－	生徒（同級生・先輩） 保護者
2年	陸上大会のプレゼンテーション －場面の説明をしよう－	生徒（同級生）
	新聞の要約スピーチ －簡潔な伝え方を考えよう－	生徒（同級生）
	「漢字の字源」のプレゼンテーション② －伝え方・教え方を考えよう－	生徒（同級生） 保護者
3年	修学旅行のプレゼンテーション －調べたことを伝えよう－	生徒（同級生） 不特定多数
	学校生活についてのプレゼンテーション －伝え方のまとめをしよう－	生徒（同級生・後輩） 大学生

これらの学習活動に対し、生徒らも意欲的に取り組み、お互いにアドバイスをし合ったり、評価をし合ったりする活動を通して、伝え方に関するスキルを積み重ねてきた。

1学年の時には、体験したことや学んだことを伝

えることを目指したプレゼンテーションに取り組んだ。「学んだことを伝える」学習では、先輩から「漢字の字源」アニメーション制作や作品の発表のしかたを学び、保護者を対象にプレゼンテーションを行った。(図1)

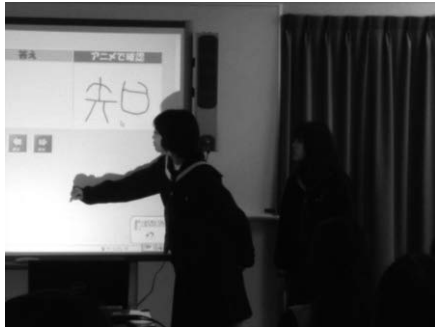


図1 「漢字の字源」のプレゼンテーションの様子

先輩から教わったことを友達同士確認し合いながらプレゼンテーションに取り組む様子うかがえた。発表後は、「すごく緊張しましたが、ちゃんと内容が伝わってればいいなと思いました。」「すごく緊張したけれど、お母さん方もときどき笑ってくれたり、うなずいてくれたりしてうれしかった。」「お母さん達の反応が面白かった。またやりたいです。」等の感想があった。緊張しつつも、伝えたい気持ちや聞き手の反応をうかがう様子がみられた。

2年生では、陸上大会の場面の説明や新聞の要約スピーチ等、伝えたいことを簡潔に表現する方法や教え方を考える取り組みを行った。陸上大会の動画を視聴し、映像の内容や感じたことを短文にまとめ(図2)、プレゼンテーションを行った。



図2 動画を視聴しながら考えをまとめる様子

プレゼンテーションでは、さまざまな場面をお互いに共有し、気持ちを伝え合うことができた。また、相互評価を通して、映像を短文として表現する際のコツや注意点を考え、「自分の気持ちをうまく整理して表すということに気をつける。」「短文を読む人が必ずしも学校の人であるとは限らないので、初めて読む人にも分かるように工夫する。」等があがった。友達からのアドバイスを取り入れようとする様子や、読み手のことを考えて工夫をしようとする様子がうかがえた。

3年生になり、第三者からの客観的なアドバイスや評価を元に、意見を出し合い内容の改善を行い、相手に伝わるプレゼンテーションを目指して取り組んだ。修学旅行では、それぞれが見学先のひとつを担当し、事前に調べたことを現地で友達に説明する活動を行った。(図3)



図3 修学旅行で友達に説明をする様子

実物を目の前にして興味津々である友達に、わかりやすく、説得力のある説明ができるよう一生懸命取り組む姿がみられた。友達に興味を持ってくれるだろうと予想していた内容で反応がよく、喜ぶ様子もみられた。修学旅行後、友達の反応や実際に見学してみて気付いたことや疑問に思ったことを加え、プレゼンテーションにまとめた。ただ伝えるだけではなく、事前に得た情報と、自分が足を運んだからこそ得られた内容を織り交ぜたり、相手を楽しませようとしたり、内容にもこだわる様子がみられた。

3. 学習の様子

伝え方のまとめの学習活動として、自立活動の時間を活用し10時間扱いで行った。後輩の手本となる

プレゼンテーションを行うこと、自分たちの学校生活の様子をわかりやすく紹介するための工夫をすることを目的し、第三者の立場として大学生からの客観的なアドバイスを受ける機会を設け、学習に取り組んだ。

(1) 発表内容の検討 [4時間扱い]

3年生は4つのグループに分かれ、グループごとにテーマを決めて、プレゼンテーションの準備を進めた。それぞれのグループのテーマは、「授業の様子について」「いまどきの中学生のコミュニケーション」「部活について」「学校行事について」であった。今までのプレゼンテーションの経験を踏まえ、資料の構成、スライドのレイアウト、発表原稿の検討や役割分担について、お互いに意見を出し合いながら、発表の準備を進めた。(図5)



図5 提示資料を検討する様子

(2) 発表に向けたリハーサル [2時間扱い]

後輩に向けたプレゼンテーションのリハーサルとして第三者の立場である遠隔地の大学生とビデオ通話によるリアルタイム型の双方向授業を行い、客観的なアドバイスと評価を受けた。

3年生は本校の多目的室、大学生は大学の講義室でそれぞれ授業に参加した。通信はSkypeのビデオ通話で行い、お互いの様子は、パソコンをデジタルテレビにつないで視聴し合った。生徒のプレゼンテーションは、電子情報ボード（スマートボード インタラクティブ ホワイトボード）を用いて行った。(図6)

授業ではグループごとに発表を行い、発表後に第三者からの視点として大学生から評価とその内容を

踏まえたアドバイスを受けた。それぞれのグループに対する大学生からのアドバイスは、他のグループの生徒も視聴した。また、自己評価の他、生徒同士もお互いの発表に対する相互評価を行った。(図7、図8)

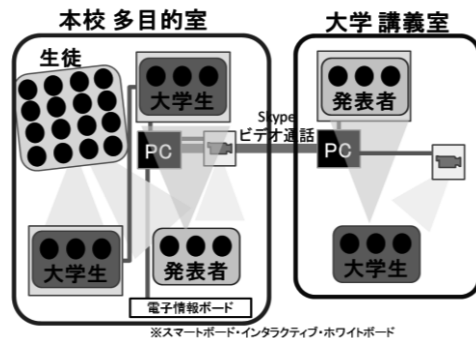


図6 本校と大学とのビデオ通話の様子



図7 生徒がプレゼンテーションをする様子



図8 大学生がプレゼンテーションを視聴する様子

(3) 学習の振り返り [2時間扱い]

大学生からの評価、自己評価、相互評価の結果を元に、グループごとに後輩に向けた発表会に備えてプレゼンテーションの見直しを行った。

学習のねらいである、後輩の手本となるプレゼン

テーションを行うために、それぞれの評価の結果を元に前時の活動を振り返った。グループ内でお互いに意見を出し合い、プレゼンテーションの表現方法について検討を重ね、グループごとにスライドや発表原稿の改善に取り組んだ。(図9)



図9 お互いに意見を出し合い検討する様子

(4) 後輩に向けた発表会〔2時間扱い〕

後輩に向けた発表会では、グループごとに大学生からどのようなアドバイスを受けたかについて2年生に説明をした上で、前時に見直しを行った内容でプレゼンテーションを行った。(図10)

生徒のプレゼンテーションは、発表に向けたリハーサル同様、電子情報ボード(スマートボードインタラクティブ ホワイトボード)を用いて行った。発表後は自己評価の他、生徒同士の相互評価を行い、2年生に対して発表内容が伝わったかどうか等の項目についてアンケートを行った。これらの結果を元に、今後のプレゼンテーションに向けての課題を各々が考えた。



図10 後輩に向けてプレゼンテーションをする様子

4. 考察

(1) ビデオ通話による双方向授業の効果について

大学生参加による学習後、ビデオ通話によるリアルタイム型の双方向授業に対しアンケート調査を行った。その結果、とても有意義だったと回答した生徒が69.0%、有意義だったと答えた生徒が12.5%であった。また、「その場で話しているような感じでよかった。」「カメラを見ながら話すのは緊張した。」等の感想があった。(図11)

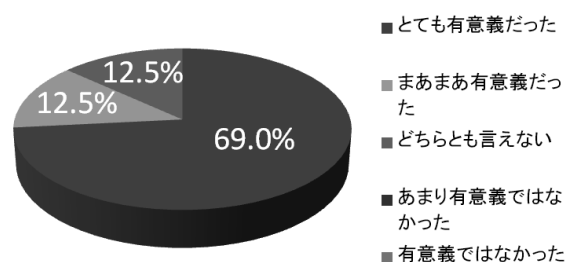


図11 ビデオ通話による授業について—本校生徒—

大学生全員からは、とても有意義だったとの回答が得られ、「きちんとコミュニケーションがとれていた。」「同じ空間にはいない相手に向かって何かを伝えようとする経験ができてよかった。」等の感想があった。

ビデオ通話による遠隔地の大学生とのリアルタイム型の双方向授業は、第三者からの評価を受ける活動として効果的であったと言える。

自己評価、相互評価の他、ビデオ通話によるリアルタイム型の双方向授業での他者評価等、さまざまな視点からの評価を得ることで、生徒らは思考を整理し、お互いの意見を出し合いプレゼンテーションの改善に取り組むことができた。学習を進めていく中でこれらの評価を取り上げることで、相手に伝えるために大切なことは何なのかについて、改めて考える機会となった。生徒の学習記録からも、評価を受ける度により具体的な目標を立てることができている様子がうかがえた。特に、大学生からの評価を受けた後の目標がより具体的になっていた。大学生からの評価が生徒にとってより説得力のあるものであったと言える。

(2) 伝えたいことが伝わったかについて

後輩に向けた発表会後のアンケート調査では、3年生が伝えなかったことが後輩に伝わったかどうかについて2年生に5段階評価で質問したところ、ほとんど伝わったと回答した生徒が73.3%、伝わったと回答した生徒が26.7%であった。(図12)「伝えたいことがはっきりしていたので、よく伝わった。」「話しの内容が分かった。」「内容が具体的にまとまっていた。」等の感想があった。

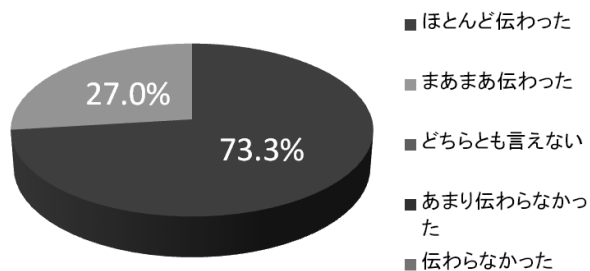


図12 3年生が伝えたいことが2年生に伝わったか

一方、伝えたいことが2年生に伝わったかどうかについて3年生に5段階評価で質問したところ、ほとんど伝わったと思う31.0%、まあまあ伝わったと思う46.0%、どちらとも言えない23.0%との回答が得られた。「自分なりに伝わりやすくするために工夫をしたから。」「みんなうなずいてくれた。」等、自分なりに工夫したところが上手くできた様子や、周りの反応から評価することができた様子がみられた。また、「ちょっと下を向いてしまった。」「自分ではゆっくり話したつもりです。」等、先輩としてももう少し上手くできたかもしれないと反省する様子がみられた。

また、3年生自身が大学生からのアドバイスを生かすことができたかどうかについて5段階評価で質問してみたところ、かなりできたと回答した生徒が30.8%、まあまあできたと回答した生徒が69.2%であった。(図13)「全てではないが、少しはやれたと思う。」「今回はスクリーンを見ずに、ちゃんと話せてよかったです。」という感想があった。

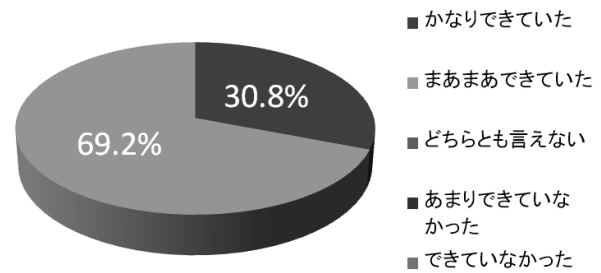


図13 大学生のアドバイスを生かすことができたか

また、2年生からみて3年生が大学生からのアドバイスを生かすことができていたかについて5段階評価で質問したところ、かなりできていたと回答した生徒が67.0%、まあまあできていたと回答した生徒が33.0%であった。「大学生からのアドバイスを積極的に生かしている様子が伝わってきた。」「大学生のアドバイスを上手く生かすことができていたので、わかりやすい発表だったと思う。」という感想があった。

これらの結果より、3年生が大学生からのアドバイスを意識してプレゼンテーションに臨み、伝えたいことを2年生に伝えることができ、達成感が得られたと言える。

後輩の手本となるプレゼンテーションを目指し、グループ内でお互いに意見を出し合い、表現方法等について検討を行った上でプレゼンテーションに取り組み、最終的に、後輩の反応や自分自身が感じた手応えを通して、今後のプレゼンテーションに向けての具体的な課題をそれぞれが持つことができた。

異学年構成による、「学んだことを伝える力」の育成を目指した学習を通して、振り返りや検討等、考えを整理する過程を経ることで、伝え方のスキルの向上につながったと言えるのではないだろうか。

5. 今後の課題

今後も「学んだことを伝える力」の育成を目指した実践として、生徒の実態やニーズに合わせたテーマでプレゼンテーションに取り組み、ビデオ通話による遠隔地の大学生との双方向授業で客観的な評価やアドバイスを得ながら継続して取り組んで行きたいと考えている。

今回、第三者である大学生からアドバイスや評価を受けることで、自分たちの考えてきたことや取り組んできたことを第三者から認めてもらえたという経験は、生徒の自己肯定感の高まりにつながり、大変有意義な活動であった。人前で話すことが苦手な活動に消極的になりがちだった生徒から、3年間の「伝える」をテーマにした学習についてのアンケートの中で、「最初は話すことがとても苦手でしたが、段々話すことが上手になって行きました。本当に良かったです。」という感想が得られた。「伝える」場面は様々あるが、自分の考えや想いが相手に伝わったという自己肯定感が得られることで、伝えることをテーマとした取り組みに対する意欲の高まりにつながることを実感できた。

大学生に向けてのリハーサルの後、評価を元に見直しを行い後輩に向けた発表に取り組んだが、このような、自分を第三者の視点から見直す場面や見直しを次の活動に生かす活動にも重点を置いていきたい。

今後実践を継続していくにあたり、生徒が自信を持って意欲的に取り組めるようなテーマの設定、お互いの考えを出し合い理解し合う場面の設定、生徒

の「伝え方のスキル」の変化や高まりを客観的に評価するための評価方法についてそれぞれ検討しながら取り組んで行きたいと考えている。

参考文献

半沢康至・田万幸子・有友愛子・柴崎功士・金子俊明（2009）,「学んだことを伝える力」の育成をめざした教育実践～漢字の字源をアニメーションで表現する学習を通して～, 第43回全日本聾教育研究大会（山形大会）研究集録, 41-42

半沢康至・柴崎功士・有友愛子・廣瀬由美・平石達彦・金子俊明（2011）,「学んだことを伝える力」の育成をめざした教育実践第2報～プレゼンテーションによる伝える学習を通して～, 第45回全日本聾教育研究大会（長岡大会）研究集録, 83-84

付記

本研究の一部は、半沢が第45回全日本聾教育研究大会（長岡大会）第6分科会 確かな学力・学力向上（教科指導）（2011.10.13）において、口頭発表を行った。